令和８年度　さいたま市立土呂中学校　学校だより

見沼のほとり

第　７　号
令和８年１１月２日

学校教育目標　　主体的に生きる人間の育成　≪意欲・健康・豊かな心≫

君たちはどう生きるか

校　長　　竹　本　久　子

「霜月」の名のとおり、朝夕の気温はめっきり肌寒くなりました。

１０月は、心揺さぶる感動の毎日を送りました。土日を含めて、多くの学校行事が行われましたが、合唱コンクールは特に印象深いものでした。「清声堂々」のスローガンのもと、１学期末から準備が開始され、毎日のクラス練習や学年リハーサルを経て、さらに高みを目指して練習に励んできました。当日は、体育館いっぱいに響き渡った歌声、静かに残る余韻を全員で味わい、心豊かな時間を過ごすことができました。感動の共有が、また一つ、土呂中生の成長の道しるべとなりました。

さて、教職員の校内研修で、先日は３年生の１クラスで道徳の校内公開授業を参観しました。教材は「二人の弟子」（出典：新版　中学生の道徳　明日への扉３　学研）というものです。時は昔（白拍子という表現から平安時代から鎌倉時代あたりと思われます）、西山寺に智行（ちぎょう）と道信（どうしん）という二人の同年輩の修行僧がいました。智行は土地の名家の三男、道信は先の戦で孤児となり、上人が引き取って育てました。十四歳のある日、上人は二人を都の本山へ送り出しました。道信はつらくて厳しい修行に耐えられず出奔し、その後、盗みをするまでに落ちぶれます。捨て鉢な気持ちのまま死のうとしますが、雪の中のフキノトウを見た時に、もう一度修行をやり直したいと決心し、西山寺に戻ってきます。一方、智行はつらく厳しい修行に耐え、真面目に熱心に取り組み、立派な僧侶となって西山寺に帰ってきます。そこで道信に再会しますが、途中で修業を投げ出した道信がどうしても許せません。相反する人生を送った二人。智行は上人は道信を許すことはない、と考えます。しかし、上人は道信の手を取り、道信を許します。智行は上人の行動を理解できず、次第にその思いは怒りに変わっていきました。その智行に向けて、上人は優しいまなざしで「人は皆、自分自身と向き合って生きていかねばならないのだ」とのみ語りました。智行はあふれ出る涙を止めることができず、立ち尽くすのでした。

授業では、智行と道信の生き方について考えました。智行は真面目にひたむきに修行に励み、自分の道を切り開きました。道信は修行から逃げ出しながら、自分の弱さや醜さに向き合い、それを克服する強さを身に付けて戻ってきました。この二人の生き方から「自分自身と向き合って生きる」とはどういうことかも考えました。そして、「自分ならどう生きるか」ということを考え、終業は終了しました。

土呂中生も、多くの学校行事を経験する中で、自分自身と向き合ったり、困難を乗り越えたりしてきています。そして、土呂中生一人ひとりに自分のこれからの人生について考え、素敵な大人に成長してほしいと思います。